ソコトラ島のキリスト教について

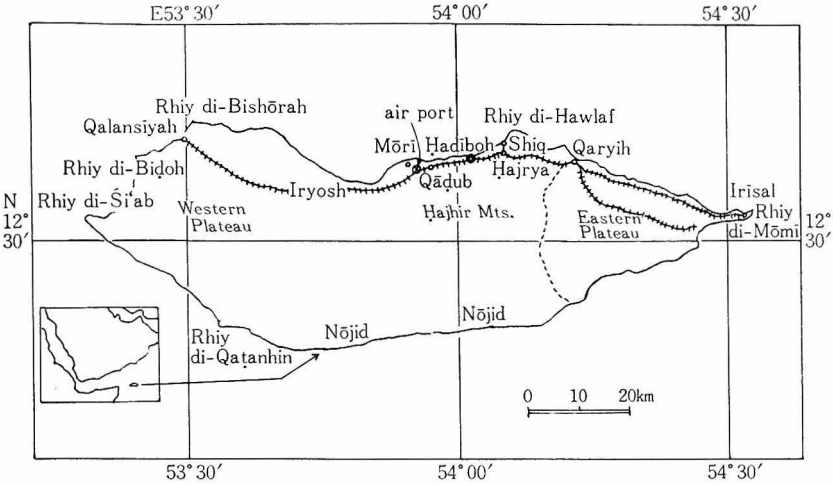
部　勇造

一　はじめに
二　ソコトラ島へのキリスト教傳來
三　ポルトガル人來島前の狀況
四　ポルトガル人來島後の狀況
五　麒麟竭のアラビア語名の由來
六　おわりに

一　はじめに

ソコトラはアフリカの角の東端ガルダフイ岬の東北東二四〇キロの海上に浮かぶ、東西一一二キロ、南北三二キロ、面積は三六〇〇平方キロと言われる島である。(1) 海拔四〇〇メートル前後の石灰岩質の高原が島全體に廣がり、東部には標高一五〇〇メートルに達する花崗岩質で險しい山地が東西に連なっている。島の北側には海岸に沿って小さな平地が點在するのが見られる。一方南部海岸地帶には、東西約五〇キロにわたって狹長な平地が續いている。島周邊の海岸はいずこも淺瀨か岩礁であるため、大型船の接岸は不可能である。氣候的にはモンスーンの影響を強く受けていて、冬季には北北東季節風によって北部海岸地帶や山地に、また夏季には南西季節風によって島の南半に、それぞれ降雨がもたらされる。季節風の變わり目には風が落ちて高溫多濕の不健康な氣候となり、マラリア蚊が發生する。島民の多くは北部に點在する集

ソコトラ島概念圖



落に住み、漁業や商業、それにナツメヤシ栽培を中心とする小規模な農業に從事してきた。山地では山羊や牛を飼う牧畜民が石室で穴居生活をおくっている。南部海岸地帶は不毛の地で人口も少ない。乾季の乾燥が嚴しいため、牧畜・農業ともに生產性は低く、また海の荒れる季節には、漁業も島外からの食糧輸入も困難になるので、近年に至るまで島民は慢性的な食糧不足にさらされていた。(2)

このように文明の中心からは遠く離れ、人が住むにも決して惠まれているとは言えない島であるが、インド洋を航行する船舶の寄港に適した地點に位置していることと、島內に龜甲・アロエ・麒麟竭・乳香・龍涎香等を產したことから、古來東西の船乘りや商人がしばしばここを訪れた。そして彼等が商品とともに持ち歸ったこの島に關する情報が、ギリシア・ローマの所謂古典史料に始まって、中世アラビア語の歷史書や地理書、さらには近世ヨーロッパ語の文獻の中に收錄されて今日に傳わっている。またその一方で、商船の寄港で外來の影響が及んだのは北海岸の一部にとどまり、島內のそれ以外の地域ではいろいろな面で非常に古い特質が隔離・保存されているという事情によって、前世紀以來ヨーロッパ諸國の多分野の專門家が來島して調査・研究を行ってきた。

ところで筆者は半ば偶然の機會から、東京外國語大學アジア・ア

フリカ言語文化研究所の中野曉雄教授とともに、一九九〇年の十一月に一週間ほど、日本人研究者として初めてこの島を訪れる幸運に恵まれた。[3] そして、その時の見聞とその後の勉強で得た知見をもとに、ソコトラの歴史と現状に關する報告文一篇を草したが、[4] この島に傳播したキリスト教の問題については、短い報告文の中で論じるには大きすぎるテーマと考えて、そこではごく簡單に觸れるにとどめた。それを今、この『東洋史研究』の紙面を借りて檢討してみたい。論考の末尾は、龍血樹から採れる麒麟竭のアラビア語名の由來について、新解釋を提案することで結ぼうと思うが、それというのも卑見によれば、ソコトラのキリスト教史の中にこそ、この問題を解く鍵が潜んでいるからである。

二　ソコトラ島へのキリスト教傳來

ソコトラ島それ自體には文獻史料は殘されていないし、考古學調査も極めて不十分な現狀では、この島の歴史は外部史料を通じて窺うしかない。ソコトラのキリスト教史を論じるに際し、まず最初に擧げるべき史料といえば、五世紀前半にフィロストルギオス（Philostorgios）によって著された『教會史』[5] であろう。その第三卷第四―六章に、西暦三五六年頃にローマ皇帝コンスタンティウス二世が、キリスト教布教のためアリウス派のテオフィロス・インドス（Theophilos Indos）、卽ちインド人のテオフィロスを南アラビアとインドとエチオピアに派遣したという記事がある。[6] 南アラビアのヒムヤル王國の支配者は改宗に同意して領内の三箇所に教會が建てられたが（第四章）、エチオピアのアクスム王國における宣教が思うようにいかなかったらしい（第六章）のは、既にその二十年餘り前にこの王國の支配者が、アタナシウス派のフルメンティウス（Frumentius）の教えを受け容れていたからであろう。ところでテオフィロスが何故インド人と呼ばれたかというと、幼時におそらく債務の擔保として、インド人が住むディブース（Dibūs）島からローマ人の許に送られてきたためであったが、彼はヒムヤルでの活動を終えてアクスムに行く前に、生まれ故鄕のディブース島に渡り、さらにそこからインドの他の諸地域に赴いてキリスト教信徒の間に見られた教義や儀禮の亂れを正したという（第五章）。

そこでこのディブース島の比定が大きな問題となる。「インド」という語を文字通りに受け取る者はディブース島もその近くに求めるので、スリランカかマルディヴ諸島を有力候補と考える。ところが四世紀ともなると、地中海世界の人々はアクスムかインドの船に便乘しなければインドへ行けぬという不便な狀況になっており、それに伴って彼等の南方世界に關する知識も一・二世紀の頃に比べて大きく後退していた。南アラビア・エチオピアあたりとインドとの區別も曖昧になっていて、「インド」という地名が紅海南部をも含めてインド洋世界全體に適用された。したがってディブース島を含む地方をフィロストルギオスがインドと呼んでいても、それが必ずしも本來のインドとは限らないのである。『教會史』の第五章を讀む限り、テオフィロスがインド洋を横斷それも往復する大旅行を敢行したとはとても思えないし、第六章の冒頭に「この大アラビアから彼はアクスム人と呼ばれているエチオピア人の許へ赴いた」と記されているのを見ると、ここでインドと呼ばれているのは南アラビアと紅海・アデン灣を挾んだその對岸地方で、ディブース島もこのあたりの島であろうという解釋の方が當たっているように思われる。その場合の候補としては、アデン灣の入口近くに位置するソコトラ島か、あるいは紅海のエチオピア沖に浮かぶいくつかの島のうちのいずれかが擧げられてきた。卑見によれば「ディブース」という島名は「島」を意味するインド系の語の轉訛であろうから、インド人が頻繁に訪れた島ということになると、紅海の島よりソコトラの方がふさわしいのではなかろうか。(7) そもそもソコトラ（アラビア語で Suqutrā）という島名自體も、サンスクリットの dvipa sukhādhāra（「幸福の島」の義）の轉訛なのであるから。

隨分前置きが長くなってしまったが、右に述べたような次第で、もしディブース島をソコトラ島に比定できるとすれば、フィロストルギオスの『教會史』の記事が、ソコトラとキリスト教の關係に觸れた最古の史料ということになる。テオフィロスのディブース島における活動については何も記されていないが、前後の文脈から判斷すると、この島もテオフィロス來島前に既にキリスト教化されていたのではないかという印象を受ける。とすると次には、何時如何なる狀況の下でキリスト教が傳來したかということが問題になるが、その點に論及する前に史料をもう一點見ておきたい。

ディブース島の比定をめぐる議論があくまでも推論の域を出ないのに對し、六世紀前半（それも半ば近く）にコスマス・インディコプレウステス（Cosmas Indicopleustes）によって著された『キリスト教徒の世界地誌』[8]は、ソコトラ島のキリスト教徒について明言した最初の史料として異論なく認められている。コスマスは若い頃インド洋で商人として活躍したが、後にネストリウス派の修道士となって隱棲しこの書を著した。ソコトラ島には寄港こそしていないが、その沖合を航行したことがあったし、エチオピアでこの島からやってきた人と遭って話をした經驗もあるという。そのコスマスが記すところ（第三卷第六五節六―一三行）を讀むと、ソコトラの島民はかつてプトレマイオス朝の諸王によって植民させられた者達で、ギリシア語を話し、その中には多くのキリスト教徒と、ペルシアで敘任されて派遣されてきた聖職者達がいたという。島にギリシア人がいたことは、『エリュトゥラー海案内記』にも記してある（註(7)參照）ので閒違いないと思うが、彼等がエジプトから植民者として送りこまれたというのは、コスマス自身か或いは彼に情報を提供したソコトラ人の誤解であろう。しかしそれはともかくとして、六世紀前半にはこの島にキリスト教が根附いていて、しかもそれがペルシアの教會[9]の管轄下にあったことを明言している點で、コスマスの證言は貴重である。

さてそこで話をキリスト教傳來の問題に戻すが、この點に觸れている史料はいずれも後世の傳承ばかりで、それらに基づく議論は先のディブース島の比定問題同樣、どこまで行っても推論の域を出ることはないということを先ず斷っておきたい。七世紀に西アジア一帶がイスラム化されると、ソコトラに關する古典語の史料は姿を消し、やがてアラビア語史料が我々の主な情報源となる。それらの著者達はいずれもこの島にギリシア人の末裔とキリスト教徒がいることに注目し、彼等の生態についての記事は殘している（この點については後で觸れる）ものの、その起源・由來に關しては前者について混亂した情報を傳えるのみで、我々の今の問題には全く參考にならない。また十三世紀にモンゴルがユーラシア大陸の大半を支配下に收めると、その領内を往來するイタリア商人やキリスト教會の使節の中に、後で見るようにインド洋を航行してソコトラのキリスト教徒に關する記事を殘す者も現れた。しかし彼等もアラブの著作家達と同樣、キリスト教傳來の歷

史については全く語ってくれない。我々がこの點に關する情報に接するのは、ようやく十六世紀になって、喜望峰回りのインド航路を發見したポルトガル人がこの島を訪れるようになってからのことである。

ジョアン・デ・バロス（João de Barros）は『アジア』[10]の第一編第七部第四章で、一五〇三年にディオゴ・フェルナンデス・ペレイラ（Diogo Fernandes Pereira）がソコトラ島を發見したことを記すにあたり、この島を「聖トマスの島」と呼んでいる。ペレイラ自身がそう呼んだのなら、史料的には彼がソコトラと聖トマスの關係に言及した最初の人物ということになるのだが、バロスの記事からはこの命名がペレイラによるのか、それとも後のポルトガル人によるものなのかよく分らない。一五〇七年のポルトガル人によるソコトラ島占領を傳える『アルブケルケ戰記』[11]も同様で、その第一部第一五章でこの島のキリスト教徒は「聖トマスの時以來」そこに住んでいたと記しているものの、この情報をアルブケルケ（Afonso de Albuquerque）自身がこの書の著者（同名の庶子）に傳えたのか、それとも他から得られた情報なのかはっきりしない。それに對し、自らこの島を訪れた聖フランシスコ・ザビエルの記述は明確である。一五四二年九月二十日附でインドのゴアからローマのイエズス會士達に宛てて出した手紙（書簡第一五）の中で、ザビエルはインドへの道中に立ち寄ったソコトラのキリスト教徒について報告し、「彼らは聖トマ（聖トマス）を尊敬し、この地方で聖トマがつくった信者の子孫であると言っています」と記している。[12]要するに來島したポルトガル人達は、キリスト教徒の住民から、聖トマスがこの島に布教したという傳承を聞かされた譯である。

聖トマスは所謂十二使徒の一人で、共觀福音書の中では極めて輕い扱いしか受けていないが、古代教會のうちシリアとその周邊の教會においては、遅くとも三世紀以後に、彼をエデッサ・パルティア・インド傳道の創始者と見做す傳承が成立して發展した。[13]このうちのインドへの布教について詳しく傳えているのが、新約聖書外典の一つ『トマス行傳』[14]である。この文書は第六一章までの第一部と六二章以降の第二部に大きく分かれ、第一部が北インド傳道を主題として、トマスがパルティアに傳道したという傳承と關係を有し、第二部より古い傳承の段階を示しているのに對して、第二部はトマ

スが南インドにも傳道したことを示すために後で附加されたものと思われる。しかし文書全體としては第二部の觀點から編集されているという。[15]

トマスのインド布教、殊に彼が南インドまで行ったのかどうかは確かめようもないことである。現在でもトマスを教會の創立者と仰いでいるマラバール地方のキリスト教徒、とりわけ「マル・トマ教會」にもトマス關係の傳承があることにはあるが、すべて『トマス行傳』をもとに後世成立したものなので、獨自の史料的價値はないという。[16] とは言え、當時（一世紀）のインド洋交易の隆盛から見て、トマスかどうかは別にしても商船に便乘した傳道者が海路インドを訪れてもおかしくないし、キリスト教徒の商人を通じて非常に早い時期にインドへもキリスト教が傳わった可能性はあると考えられている。四世紀の半ば近く、ササン朝のシャープール二世の迫害を逃れて、メソポタミアやペルシアから相當多數のキリスト教徒が南インドへ亡命したようだが、その際の移住は既にそこにあったか、もしくはあると信じられたキリスト教徒の共同體を頼って行われたらしい。[17]

聖トマスのインド布教の傳承がこのようにかなり早い時期に成立したのに對し、ソコトラへの布教の傳承は、史料的には十六世紀のポルトガル人來島以前には遡れない。『トマス行傳』にはソコトラ訪問の話など出てこないから、このエピソードは後に『行傳』から派生した傳説の中で附け加えられたのであろう。ソコトラに實際にはどういう形でキリスト教が傳わったかは別にして、トマス傳説の方はペルシア灣を通じてか、或いは一旦南インドを經由してもたらされたと考えられる。既に記したように、六世紀にはソコトラのキリスト教徒はペルシアの教會の管轄下に置かれていたし、またポルトガル人來島當時はマラバールのそれと關係が深かったという。[18]

この極めて不確かな傳承を除くと、ソコトラへのキリスト教傳來に關する具體的な手懸りはなく、あとはインド洋周邊の他の諸地方への布教例から類推する途が殘されているだけである。右に記したインドと同じような形で、ソコトラへもかなり早い時期にキリスト教が傳わった可能性はあるし、また後にペルシアの教會の管轄下に置かれていることからする

と、四世紀の前半にササン朝の迫害を逃れた亡命者の一部がこの島に渡ったこともありうる。三世紀の後半から六世紀前半にかけて、アラビア南岸部がアクスムの影響下に置かれ、インド洋ではアクスム商人がペルシア商人と覇を競って活躍したことを考えると、ソコトラへの最初の傳道者がエチオピアから來た可能性も否定できない。このようにいくつかの可能性を想定することはできるが、結論の出ぬ作業をこれ以上續けたところで大した意味もないと思われるので、この件はここらで打ち切って次の問題に進む。

三　ポルトガル人來島前の狀況

七世紀のイスラム化の波はソコトラにも及んだであろうが、この時期の適當な史料がないので事情はよく分らない。オマーンの史料によると、次の八世紀の中頃にはオマーンのイマームの權力がこの島に及んでいて、島内ではキリスト教徒とイスラム教徒の爭いもあったようである。[19] 兩者の爭いは先住民と新來の移住者の閒の爭いでもあったろう。イスラム教は支配者の宗教であるにもかかわらず、この島では容易に廣がらなかった。十世紀前半の南アラビアの歴史家ハムダーニー（al-Hamdānī）は、逆に南アラビアのマハラから來た人々が、先住者の影響でキリスト教徒になってしまったと言っている。また彼はアデンの人々から聞いた話として、島内でハーリジュ派とスンニー派のムスリム同士の鬪爭があったことも傳えている。[20] ソコトラのキリスト教徒の健在ぶりを實證するかのように、八八〇年から一二八三年へかけての閒に、東シリア教會（ネストリウス派）がソコトラの主教を任命した例を、史料的に四例確認できるという。[21] 六世紀のコスマスも、ソコトラの聖職者はペルシアで敍任されてくると言っているので、その體制がたとえ斷續的にせよ少なくとも十三世紀までは存續していたことになる。もっともコスマスは聖職者の位階までは特定していなかったが、その點を明言して少々物議をかもしているのがマルコ・ポーロである。彼は十三世紀の後半に、インドを出てペルシア灣のホルムズへ向かう航海の途中で、ソコトラの話をいろいろ聞きこんだらしい。キリスト教に關しては、この島の「大主教」はバウダック（バグ

ダード）のヤトリック（カトリコス）によって任命され、彼自身はソコトラの北方五百マイルほどの所にある男島の主教を従えていると述べている。[22] しかし右にも記したように、ソコトラの主教についての記録なら數例あり、しかもそのうちの最後の例はポーロの航海から間もない一二八三年のものであるのに對し、大主教が任命されたという記録はない。ポーロのソコトラや男島・女島に關する話はすべて傳聞に據ったもので、どうもこの件については彼が間違っているようである。[23]

ポーロはこの他にもソコトラのキリスト教徒について耳にしたことを語っていて、それらは他の史料にも見える記事なので、どうやら當時の人々のソコトラ島とその住民に對する一般的なイメージであったらしい。まず第一に、この島は海賊の根城と目されて、特にムスリムの船乘りや商人から恐れられ憎まれていたようである。『東方見聞錄』には、

またこの島へは、洋上を游弋して仕事を果たした海賊たちが多數その船を操ってやってくる。彼等はこの島で野營しつつその掠奪品を賣却するのであるが、この盜品は實によく賣れる。それというのも、キリスト教徒である島の住民はこの盜品が偶像教徒やイスラーム教徒から劫掠されたものでこそあれ、キリスト教徒から奪われてきたものではないことを知っているので、どしどしそれを買い取るからなのである。

と記されている。[24] ソコトラが海賊の巣窟であることは、既に十世紀前半にマスウーディー（al-Masʿūdī）が特筆しており、[25] また十四世紀前半の大旅行家イブン・バトゥータ（Ibn Baṭṭūṭa）も、メッカで同様の話を聞きこんでいる。[26] ただ兩名とも、海賊はインド人と明記している。

このソコトラの海賊に對エジプト十字軍の片棒をかつがせようとした卓見の士がいた。十四世紀初めのドミニコ會士ギヨーム・アダム（Guillaume Adam）は、後にイル汗國の首都スルターニーイェ駐在の大司教に敍せられた人物であるが、それに先立つおそらく一三一六年よりやや早い時期に、ペルシア灣を出てアラビア半島を西に周航してエチオピアに向かう途中、ソコトラに寄港して九箇月間も滯在した。當時はヨーロッパのキリスト教勢力とイル汗國が手を結んで、エジプ

トのマムルーク朝を挾撃する作戦がいろいろ考えられていた頃で、アダムもソコトラ滞在中に、この島の好位置と多數のキリスト教徒の存在、そしてそこが特にアデンのムスリム商人に敵對する海賊達の根據地となっていることに注目し、この島をキリスト教軍の海軍基地とし、海賊も動員して、アデン灣・紅海經由でエジプトに輸送される物資、殊にエジプトの諸港に禁輸を破って入港するヨーロッパの商船に轉賣される食糧品の流れを遮斷すれば、エジプトのイスラム勢力に大きな打擊を與えることは必至と提案している。[27] この計劃がヨーロッパの爲政者や教會關係者にどの程度アピールしたかを示す史料はないが、約二百年後にポルトガル人がインド洋で行ったことを先取りするような作戰であるのは興味深い。

ポーロはソコトラのキリスト教徒が魔術師という評判をとっていることにも注目して、次のように述べている。[28]

またこの島のキリスト教徒は世界でも類のない魔術師である。大主教は彼等にかかる魔法を使わせたくはないので、彼等に警告し勸告するのであるが、聽かれないのがその實狀である。島民に言わすれば、彼等の祖先が昔から行なってきた所だから、自分たちも同樣にそれを行ないたいというのである。島民がこのように魔術を行ないたがるので、大主教もそれをなんともできず、ほかに方法がないままに默過している。かくしてこの島のキリスト教徒はほしいままに魔術を行なっているわけなのである。

そしてこれに續けて、彼等が思うままに天候を左右して船の運航を支配することが、魔術の具體例として擧げられている。

この、ソコトラのキリスト教徒が魔法を使うという話は有名だったようで、ほぼ同時代のアラビア語史料[29]やさらには中國語の史料[30]にまで登場する。

十五世紀末の事情を傳えて貴重なのがイブン・マージド（Ibn Mājid）である。彼によると、[31] この島の住民はギリシア人の末裔とも言われる「惡黨の」（もしくは「野蠻な」）[32] キリスト教徒どもであるが、南アラビアから來たマハラ人（彼等は明らかにムスリム）が砦を築き、島民の一部に賦役と貢納を課して支配していた。島民〔の多く〕を支配してきたのは一人の女

性で、教會に住む司祭（カシース）も彼女の言葉に從って務めを果してきたが、この當時はその女性の力もすっかり衰えてしまっていたという。ポルトガル人が來島したのは、まさにこのような時期であった。

四　ポルトガル人來島後の狀況

バロスの『アジア』の第二編第一部によると、一五〇五年に歸國したペレイラやその他の者からソコトラの事情を聞いたポルトガル王ドン・マヌエルは、次に出發する艦隊にこの島を占領することを命じた。それはそこをインド航路上の重要な據點とすることができると考えたのと、キリスト教徒の島民をイスラム教徒の支配から解放するためであった（第一章）。トリスタン・ダ・クーニャとアフォンソ・デ・アルブケルケに率いられた艦隊は、一五〇七年にマハラ人の守備隊を破ってこの島を占領した。そして彼等の砦を奪ってこれを自らの要塞とし、そこに百名に達する人員を駐留させた（第三章）。そこで初めて知られるようになったこの島のキリスト教徒の實態を、バロスが詳しく書き記している（同章）ので、それを以下に要約してみよう。

島の人々はみなヤコブ派のキリスト教徒でアビシニア人の種族に屬するが、その慣習の多くをまもっていない。男性の大部分は使徒の名前を持ち、婦人はマリア、〔イサベル、アナ〕という名前を持っている。彼等の崇拜の對象は十字架であって、各人はすべて十字架を首にかけるのを習慣としている。また彼等はいくつかの禮拜堂を持っているが、そこでも十字架が崇拜の對象である。かれらの祈禱はカルデア語で行われる。かれらは割禮と待降節のような斷食を行う。彼等は自分達が得たその年の新しい收穫から十分の一稅を教會に納める。

バロス自身はソコトラを訪れたことはなく、專ら文書資料と傳聞に據って本書を執筆したので、右に要約したキリスト教徒に關する記事も、この後紹介するバルボザやザビエルのそれに比べてかなり觀念的である。果たして實態がこの通りであったのか、不審の念を抱かされるような箇所もある。彼がソコトラのキリスト教徒をヤコブ派と判斷した理由はよく

分らないが、既に記したことからも明らかなようにこれは誤りで、正しくはネストリウス派であった。[33] もっともどの派に屬すると言っても、教義や儀禮の問題ではなく、どこの教會の管轄下にあったかということなのであるが。アラブの著述家達によってギリシア人の末裔扱いされてきた島民も、ポルトガル人の目にはエチオピア人の同族としか映らなかったようである。ただこれは外見上の特徴を捉えてそう言ったというより、割禮等の特殊な儀禮を行う點でエチオピアのキリスト教徒と同類と判斷したのであろう。

再びバロスの『アジア』に戻ると（第三章）、ポルトガル人のマハラ人に對する勝利が確定すると、山に避難していたキリスト教徒達も戻ってきて、不信心者（イスラム教徒）の支配からの解放を感謝するとともに保護を願い出た。そして艦隊に同行してきたフランシスコ會士のアントニオ神父より、教會に改められたモスクで洗禮を受けたという。このように最初は良好であった島民との關係が間もなくおかしくなり、要塞のポルトガル人は島民による奇襲とそれ以上に深刻な食糧不足に苦しむことになった。バロスはこれを、「ポルトガル人は土地を奪うつもりだ。かれらは、インディアでも同じことをしてきたのだ」ということをソコトラ人に信じこませたイスラム教徒の扇動のせいにし、さらに「われわれは常にかれらがイスラム教徒との間に友情を保っているのではないかと疑っていた。というのはイスラム教徒はかれらの間にはいりこんでおり、またソコトラの婦人たちと結婚して子供を儲けていたために、かれらの間にとけこんでいたからである」と記している。マラリアと食糧不足で多くの犠牲者を出した擧句に、ポルトガル駐屯部隊がソコトラからの撤退を餘儀なくされたのは、占領から僅か四年後の一五一一年のことであった。

一方、バロスと異なりポルトガル軍に加わってソコトラに上陸した經驗を持つドゥアルテ・バルボザ（Duarte Barbosa）は、この島のキリスト教徒を、昔からの儀禮のいくらかは遵守しているものの、教義も知らなければ洗禮も受けていない、名前だけのキリスト教徒と斷じている。[34]

一五四二年にソコトラに立ち寄ったイエズス會士フランシスコ・ザビエルの場合は、自身が聖職者だけに、この島のキ

リスト教徒の境遇に非常な關心を示している。先にも引いた彼の書簡第一五から少し引用してみよう。(35)

この島の人びとの考えによれば、〔島民は〕キリスト信者だそうで、彼らはそう思いこんでいます。(中略)この人びとはきわめて無知で、讀むことも書くことも知らず、本も聖書もありません。ほとんど知識のない人びとですが、キリスト信者であるということを誇りにしています。彼らには教會、十字架、ランプなどがあります。どの村にもカシズがいますが、これは私たちの聖職者のような者です。このカシズも讀み書きを知りませんし、本も聖書も持っていません。カシズたちはたくさんの祈りを暗記して覺えているのです。(中略)信者たちは、カシズの唱える祈りが自分たちの言葉ではないために、〔その意味を〕理解しません。私にはカルデア人の言葉だと思われます。(中略)彼らは聖トマを尊敬し、この地方で聖トマがつくった信者の子孫であると言っています。(中略)カシズたちは洗禮を授けませんし、洗禮が何であるかも知りません。

そこでザビエルは村々で澤山の子供達に洗禮を授けて、父母達から大いに感謝された。この島が宣教に見込みありと思った彼は、島に殘留することを總督に願い出たが許可されなかったと、同じ手紙の續きに記している。しかしインドへ渡ってからも、この島の教徒達のことはザビエルの念頭を離れなかった。一五四八年の十月から翌年の二月にかけて、コーチンから發信された數通の手紙(36)の中で、彼はアルフォンソ・チプリアノ神父と他に數名のイエズス會士をソコトラに送るという計劃を打明けている。(37)

十七世紀になると、イギリスの東インド會社の船がソコトラに頻繁に出入りするようになった。ポルトガル人とは異なり、彼等には島の支配や宣教の意圖はなく、寄港の目的は給水とモンスーンの季節の強風からの避難、特產品のアロエの購入、それに船同士の連絡のためであった。東インド會社關係の文書の中に、この世紀を通じて來島したイギリス人の記錄をかなり見出すことができる。またこれらイギリスの軍人や商人の日記と手紙の中にも、ソコトラでの見聞が書き留めてあって參考になる。ただ殘念なことに、彼等はこの島のキリスト教徒の存在などには殆ど無關心であったらしく、本稿

の役に立つような情報は極めて少ない。僅かに、一六一五年インドのムガール宮廷に大使として赴く途中、この島に立ち寄って一週間餘りを過した、トーマス・ロウ（Thomas Roe）卿の日誌の八月二十四日の項に關連の記事があるので、それを見ると、[38] ロウ卿は島民を四種に分類し、その第三番目について、ベドウィンと呼ばれるこれらの人々は、島の原住民（卿はこれを第四番目に分類している）ではないにせよ古くからの住民で、山に住んで人口も非常に多く、歴史家達によってヤコブ派キリスト教徒と呼ばれてきたのは彼等のことである、と記している。そして卿は彼等をヤコブ派キリスト教徒と判斷した理由として、隨行員の一人のボートン氏（Mr. Boughton）がタマラ（ソコトラの行政中心地ハディーボの古名）の近くで荒れ果てた教會を目擊したことを擧げている。その教會には人影もなく扉は閉じられていたが、ボートン氏が同行のムスリムのシェイクが止めるのも聞かずに中に入ってみると、畫像の描かれた祭壇があり、その上には十字架が置かれていたという。そして同行のシェイクは、その教會の信徒達のことを聞かれるのを非常に嫌がったということである。

十七世紀の初めには、ソコトラにはまだキリスト教徒が殘存していたが、支配者のムスリム側では、イギリス人がそれを知り彼等の窮狀に同情を示したりして面倒がおこるのを恐れていたのであろう。なお右の記述からも分るように、ロウ卿がソコトラのキリスト教徒をヤコブ派と呼んでいるのには何の意味もない。

さて、ソコトラのキリスト教徒に關する最後の記錄は、同じ世紀の後半に來島したカルメル會士ヴィンチェンツォ神父（P. Vincenzo）のそれだと言われている。[39] 殘念ながら筆者はまだこの書を見ることが出來ずにいるが、ユール（Henry Yule）の紹介[40]によってその內容を知った。それによると、島民は依然キリスト教徒と自稱していたが教義については何も知らず、月へ犧牲を捧げたり、割禮を行ったり、酒と豚肉を禁忌とするというような、どの宗教のものとも分らぬ奇妙な儀禮を遵守していた。教會は暗く汚く、日毎聖油がわりのバターを塗られていた。祭壇に置かれた十字架が盲目的な崇拜の對象になっており、信徒達が教會に參集して祈りを捧げる時には澤山の香が焚かれた。祭司達はオダンボ（Odambo）と呼ばれ、信徒達によって選出・聖別され、毎年交代した。彼等は洗禮や他の祕蹟に關しても全く無知であった。島には魔術を

使う者が多くいた。また女達は皆マリアと呼ばれていた。以上のヴィンチェンツォ神父の報告は、大筋においては前世紀のポルトガル人達のそれと違わない。この一世紀半ほどの間に、島のキリスト教徒人口は減少したかもしれないが、信仰生活の實態に大きな變化があったようには見えない。

歐米語のソコトラに關する史料が空白となる十八世紀は、實はオマーンの勢力が著しく伸張した時期であった。特に世紀の半ばに成立したアール・ブー・サイード朝（Āl bū Sa'īd）は、ペルシア灣岸やマクラーンから東アフリカ沿岸地方に至る一大海上帝國を築き上げ、ソコトラもその支配下に入った。十九世紀初めにはワッハーブ運動がこの島をも席卷したが、オマーンの支配は搖がなかったようで、一八三三年にマスカットに寄港したアメリカ人のロバーツ（E. Roberts）は、オマーン領のアフリカの島々の一つとしてソコトラの名を擧げている。[41] しかし實はこの時がオマーンの絶頂期で、以後その勢力は衰退した。十九世紀に入りエジプトにメフメト・アリー政權が成立したことや、蒸氣船の登場という新しい事態に對處するため、イギリスは紅海の入り口あたりに給炭地を求めた。そこで東インド會社は一八三四年に軍艦を送って、アラビア南岸や附近の島々の調査を行わせた。そしてその際ウェルステッド（J. R. Wellsted）大尉が行った詳しい調査を參考にして、翌一八三五年には遂にソコトラ島を占領するに至るのであるが、この時にはもう島にキリスト教徒は存在しなかった。島民は皆イスラム教徒と名乘った。もっともベドウィンの信仰はかなり怪しく、ラマダーンの斷食も行わなければ朝晩の祈りが義務であることも知らない、とウェルステッドは書いている。[42] また彼は調査中に、かつての禮拜所の跡という壞れた建物を示されたが、あまりにも荒れ果てていて果してその通りのものかどうかの見極めはつかなかったし、他に島内でキリスト教と結び附くような手懸りは何も發見できなかったという。[43]

一八九六年十二月から翌年二月にかけて島の調査を行ったベント（Th. Bent）は、各地で教會址と思われる建物の跡を認めたと言っている。[44] しかしその判斷の確かな根據は擧げられておらず、一九五六年にやはり島内の調査を行った考古學者のシンニー（P. L. Shinnie）は、ベントが教會址と考えたらしいいくつかの遺跡を調べたが、いずれもそれほど古くない

小屋の跡のようであったと報告している。[45] この他イギリス海軍のジェイコブ（H. F. Jacob）が、一九一一年に島に渡った折に同行のベリッジ氏（Mr. Berridge）が教會址を發見した、と記しているが、[46] 詳細は一切不明である。

このように、オマーンの支配下に置かれてワッハーブ運動なども行われた十八世紀から十九世紀へかけての間に、ソコトラのキリスト教の傳統は遂に途絶えて、今ではその痕跡を捜し求めるのさえ難しい狀況になってしまったのである。先にも引いたユールは、島の北西海岸にある集落の名「カランスィーヤ（Qalansiyah）」は、ギリシア語で教會を意味する「エクレースィア（ἐκκλησία）」の轉訛で、島民のかつての言語と宗教の名殘りを僅かにとどめているのではなかろうかと言っているが、[47] 他にもこのような例はないであろうか。筆者は、ソコトラを代表する龍血樹から採取される麒麟竭のアラビア語名「（二人の）兄弟の血」の中に、それを認めることができると考える。

五　麒麟竭のアラビア語名の由來

龍血樹（英名 dragon tree 又は dragon's blood tree）というのは、本來カナリア諸島を原産地とするユリ科リュウゼツラン亞科ドラセナ屬の常緑高木ドラセナ・ドラーコ（*Dracaena draco*）の邦名であるが、ソコトラ島の高原の各所に群生する近縁種ドラセナ・キンナバリ（*Dracaena cinnabari*）も、通常この同じ名で呼ばれる。丁度おちょこの傘のような特徴のある樹形で、[48] 幹頂で放射狀に分かれてやや上向きに張り出した枝に、長さ約五〇センチ、幅約三センチの披針狀の葉が多數密生している。この樹の濃紅色の樹脂が藥用及び着色劑として古來島の特産品となっていて、英語で dragon's blood、邦名では麒麟竭と呼ばれる。ところがこの名稱に一つ問題があり、混亂のもとになりかねないので、その點を最初に少し詳しく說明しておく。それは、この樹脂には類似の品が數種あり、それぞれの起源が異なるにもかかわらず、名稱のうえでそれが正しく區別されていないという問題である。龍血樹の樹脂が麒麟竭と呼ばれるというような妙なこともここから生じた。

既に一世紀のローマ世界でこの問題はおきていた。辰砂（水銀と硫黄の化合物）と麒麟竭の色と用途が似ているために、両者がともにキンナバリと呼ばれたことによって混亂が生じていたことが、プリニウス[49]やディオスコリデス[50]によって傳えられている。辰砂と區別するため麒麟竭の方は特に「インドのキンナバリ」と呼ばれた[51]。これはおそらく當時の地中海世界の人々が、これをインド産と考えたか、或いはインド商人の手によってこの商品が運ばれてきたことによるのであろう。但し『エリュトゥラー海案内記』では、インドのキンナバリはソコトラから輸出されるだけで、肝心のインドの諸港からの輸出品には含まれていない。一方プリニウスは、これが實はインドで象によって押しつぶされた大蛇（draco）の血と、この蛇によって吸われた象の血が混ざった血の固まりであると述べるのみで、産地についての正確な情報は傳えていない。カッソン（L. Casson）が推察するように[52]、後述するマレー・スマトラ産の別種の麒麟竭がインド經由で將來されるということも既にあったかもしれないが、いずれにせよ西方の人々は、この商品の産地や由來について曖昧な知識しか有していなかったようである。因みにプリニウスは別の箇所で[53]インドの象と大蛇（draco）の鬪いについて詳しく記している。それによると、象の隙を狙って身體に卷きついた大蛇は、その一番柔かく弱い部分にかみついて血を吸い盡くすが、倒れた象の下敷きになり、その重味で押しつぶされて自らも血を流して死ぬという。これがインドの説話にでも遡源する話なのか、それとも「インドのキンナバリ」の由來を説明するためにギリシア商人あたりが作り出した話なのか、俄には判斷がつかないが、ともかくこれが英語を始め西歐諸語におけるこの樹脂の、「龍の血」を意味する名稱の起源となったことはおそらく閒違いあるまい。またアラビア語の名稱のうち、ダム・アッティンニーン（dam at-tinnīn）とダム・アッスゥバーン（dam ath-thu'bān）も、明らかに同じ意味である。

歐米語で「龍の血」と呼ばれる樹脂には、龍血樹のそれの他にも數種ある。その中で最も重要なのが、マレー半島やスマトラを始めとする東インド諸島に産する、ヤシ科キリンケツ屬の蔓性の籐、デモノロプス・ドラーコ（*Daemonorops draco*）の果實から採れる紅色の樹脂で、今日では産出量の點で他を壓倒しているため、品種や産地を特定せずにただ dragon's

blood とか麒麟竭と言った場合は、むしろこちらを指すほどである。[54]

中國では、[55]唐代の文獻に「騏驎竭」という物産の名が散見するのに對し、宋代になると「血竭」という名が現れる。[56]この語は元・明代の史料にも引續き見えるが、明代では騏驎竭と同義語になってしまっているという。シェイファーは、騏驎竭は元來東南アジア産の樹脂〔卽ちデモノロプス・ドラーコのそれ〕を指したのに對して、血竭の方は西アジア産の樹脂〔卽ちドラセナ・キンナバリのそれ〕を指したのであろうと言い、歷史研究者が兩者を安易に同一視するのを戒めている。

このように、龍血樹も麒麟竭もかなり曖昧な用語なのであるが、通稱としての便利さにはやはり捨て難いものがあるので、本稿の以下の部分においてもこれらの語を使い續けたい。但し、それらがソコトラ産のものを指す場合には、その旨を明記することにする。

さて、麒麟竭のアラビア語名としては、先に擧げた「龍の血」を意味する二つの他に、樹脂が幹を滴狀にしたたることに由來するカーティル（al-qāṭil）、色がサフランや蘇芳に通ずることに由來するアイダァ（ayda）[57]やアンダム（ʿandam）があるが、それに加えてダム・アルアフワイン（dam al-akhwayn）、卽ち「（二人の）兄弟の血」という極めて特異な呼び名がある。[58]これが元來はソコトラの麒麟竭に特有の名であったらしいことは、先にも引いた十世紀前半の南アラビアの歷史家ハムダーニーが、ソコトラの特産物としてダム・アルアフワインを擧げた後で、これはアイダァのことであると態々斷っていることや、[59]時代は少し下るが十二・三世紀のヤークートも、同じようにダム・アルアフワインの名を擧げた後、これはソコトラに特有の樹木の樹脂でカーティルとも呼ばれる、と說明を附け加えていることから窺えるのである。[60]

この特異な名稱の由來について、管見によればこれまで二つの說が提唱された。一つは『エリュトゥラー海案內記』を英譯したショッフ（W. H. Schoff）が、その第三〇節の「インドのキンナバリ」に附けた註釋の中で開陳している說で、[61]プリニウスが傳える象と大蛇の鬪爭の話をもとにしている。ショッフによると、この話はインドのバラモン＝ヒンドゥー教

系の民話で、象は創造神ブラフマー、大蛇は破壞神シヴァのそれぞれ化身であり、プリニウスの話はこの兩神の絶えざる鬪爭を象徵していて、そこで流される血が「兄弟の血」と呼ばれるのは、この兩神がバラモン＝ヒンドゥー教の三主神のうちの二神であることによるという。しかし、プリニウスの記事それ自體にインドの神話とのつながりを示唆するような字句がないうえに、インド側にこの話と對應するような神話なり說話なりを見出せない以上、ショッフのこの說は單なる臆說の域を出るものではない。インドの文學に素人の筆者に斷言は出來ないが、象と大蛇の鬪爭をブラフマーとシヴァのそれと見做すことも、この二主神を兄弟と呼ぶことも、ともに非常に難しい解釋なのではなかろうか。またショッフはこの話がソコトラの麒麟竭に關連してなされた話であるかのように記しているが、これは全くの誤解で、プリニウスはインドの話としてこれをしているのであり、インドのキンナバリについても、それがソコトラに產するとはどこにも書いていない。したがってソコトラ起源と思われるアラビア語名の由來を、プリニウスに求めるのは無理である。

他方ジェイコブは先に引いた著書の中で、右の說を出典を明示せぬままなぞった後で第二の說を提案している。[62] それは古典史料におけるソコトラ島の名稱ディオスクーリデース（Dioskūridēs）に因むものである。この名は、サンスクリット名 dvīpa sukhādhāra（幸福の島）の轉訛に、それと似た音を持つ、ギリシア神話で船乘りの守護神とされる雙子神 Dioskūroi（ゼウスとレーダーの間に生まれたカストールとポリュデウケース）の名が作用して出來たのではないかと一般に考えられている。そこでジェイコブは、ソコトラの麒麟竭のアラビア語名も、島名同樣ギリシア神話の雙子神に因んでいるのであろうと推量する譯である。もしこの島のアラビア語名がギリシア・ラテン語名からの轉訛で「雙子神（の島）」とでもいう意味を有するのであるなら、この說もかなりの說得力を持つであろう。しかし事實はこれと異なり、アラビア語の島名 Suqūṭrā は、明らかにサンスクリット名の後半分 sukhādhāra（幸福）からの轉訛で、雙子神とは何のつながりも有していない。アラブの船乘り達がギリシア起源の雙子神を航海の守護神としていたという話も聞かぬし、[63] またこの兄弟神が何故に血を流すのかも明らかでない。

以上の二説にかわる第三番目の説を提唱するにあたって筆者が依據するのは、最初にも記したようにソコトラ島のキリスト教史である。ポルトガル人達が傳えるように、島民達は聖トマスによって島にキリストの教えがもたらされたという傳承を保持していた。このトマスは共觀福音書の中では輕い扱いしか受けていないが、後にシリアとその周邊の教會で重要な地位を占めるに至ったことが、新約聖書の外典文書の研究を通じて明らかにされている。そこで本章の主題との關連で重要なのは、彼がこれらの文書の中でキリストの雙子の兄弟としての扱いを受けている點である。既に正典の『ヨハネによる福音書』の中に(64)「デドモと呼ばれるトマス」という表現が見られるが、「デドモ」とは取りも直さずギリシア語で「雙子（正しくはディデュモス）」を意味する。またそもそも「トマス」という名が、ヘブライ語やアラム語で「雙子」を意味する語のギリシア語形（音譯）で、元々は普通名詞であったらしい。(65) 彼はさらに外典の『トマスによる福音書』(66)の序言でも「デドモ」と言われ、『トマス行傳』（註(14)參照）の第三九章では「キリストの雙兒、いと高き者の使徒」とさえ言われている。『鬪技者トマスの書』においては、キリスト自身によって「わたしの雙子の兄弟」と呼びかけられているという。(67) このように破格の扱いを受けるに至ったトマスが、エデッサ・パルティア・インド傳道の創始者と見做されているということは既に記した。その最期については、『トマス行傳』の第一五九―一七一章に詳しい。そこでは、彼はインドにおいて槍で突かれて殉教したと語られている。

トマスの生涯や業績の重大事は、ソコトラを含めて、彼を傳道者と見做す諸地域に當然知れわたったことであろう。そこで彼をキリストの雙子の兄弟として尊崇するソコトラの人々の目に、龍血樹から滴る赤い樹脂が、龍の血ならぬ殉教者トマスの血と映ったのではないかというのが、筆者の推論の眼目である。ことによると、それは十字架にかけられたキリストが流した血そのものを連想させたかもしれない。そこからこの樹脂は「雙子の兄弟の血」と呼び慣わされるようになり、それが現在まで傳わるアラビア語名ダム・アルアフワイン、卽ち「(二人の) 兄弟の血」の元になったのではなかろうか。このように考えると、ソコトラの麒麟竭に與えられたこの一見不可解な名稱の中に、我々はかつてこの島で信奉され

たキリスト教の痕跡を認めることも出來るのである。

右の筆者の説が當たっているか否かは讀者の判斷に任せるとしても、本章で見てきた龍血樹と麒麟竭、及びその名稱をめぐる様々な論爭に、ソコトラの長い歴史が凝縮されているということは、閒違いなく言えるであろう。

六　おわりに

何時如何なるルートを經てソコトラ島にキリスト教が傳わったのか、結局確かなことは分らなかった。分っていることといえば、遲くとも六世紀の前半までにはこの島にキリスト教が根附いていたということと、その時代においても、またそれに續く時代においても、ペルシア灣ルートを通じてネストリウス派教會の影響が非常に強かったということ、それと何時の頃からか島民が聖トマスを傳道者と信ずるようになっていたということである。ネストリウス派教會の管轄下に置かれたといっても、ソコトラで行われたキリスト教がかなり獨自性の強いものであったらしいことは、觀察者達の記錄からも窺えた。割禮や食物に關する禁忌は、紅海ルートで傳播したエチオピア教會の影響であろうか、それともやがて島の支配者の宗教となったイスラム教のそれであろうか。月へ犧牲を捧げたり魔術を使い續けたりしたというのは、キリスト教傳來以前の信仰の根強さを物語っていよう。まさに同じことがイスラム化した島民、特にベドウィンの閒でも觀察されるのである。

西アジア世界全體にイスラム教が廣まってからも、イラクやイラン、それに南インドのキリスト教會と連絡をとり合って、數百年閒にわたって信仰を守り續けたソコトラのキリスト教徒であったが、その關係が希薄になりマハラやオマーンから渡ってきたムスリムの支配が強まるにつれて、教義や儀禮の意味は次第に忘れ去られ、やがて洗禮さえ行われなくなり、遂には十八世紀から十九世紀へかけての閒に消滅してしまった。今日ではその痕跡を見出すのさえ難しい狀況であるが、筆者は島の特産物である麒麟竭のアラビア語名の中にそれを認めることが出來るのではないかと考えて、十分とは言

えぬまでもその論證を試みた。しかし島にはかつての教會や禮拜堂の跡が遺っている可能性もなお捨てきれず、その方面の詳しい考古學調査が行われることが望まれる。最近フランスの考古學者オードゥアン（R. Audouin）氏から屆いた便りによると、フランス・イエメン合同調査隊が本年（一九九三年）の一月から二月にかけて行う豫定の調査には、ソコトラ島も調査對象に含まれているとのことである。今回は豫備調査が行われるだけかもしれないが、これが將來この島のキリスト教史の解明にも寄與するものとなることを期待しつつ、筆を擱きたい。

註

（1）*Red Sea and Gulf of Aden Pilot*, Published by the Hydrographer of the [British] Navy, 12th ed., 1980 (rev. 1987), p. 289 による。これらの數値は文獻により多少差があり、いずれも概數である。なお添附の概念圖を參照のこと。地名表記法は、一九七八年にイギリスの王立地理學會から發行された地圖（Socotra 1:125,000）のそれに從った。これはジョンストン（T. M. Johnstone）によってソコトラ語から翻字されたもので、一般に通用しているアラビア語名とは異なるところもある。

（2）一五〇七年にはポルトガルが、また一八三五年にはイギリスが、インド航路の據點とするためにこの島の占領・支配を企てたが、いずれの場合にも食糧不足とマラリアが原因で、數年後には駐屯部隊の撤收を餘儀なくされたほどである。

（3）我々のソコトラ訪島の經緯については、『オリエント』第三五卷第二號に掲載豫定の拙稿「イエメン・レポート——調査（一九九〇年十月～十二月）報告と學界動向——」と、次註に擧げる拙稿の、それぞれ冒頭に記したので、ここでは繰り返さない。

（4）『日本中東學會年報』第八號に掲載豫定。

（5）J. Bidez (hrsg.), *Philostorgius Kirchengeschichte*, Leipzig, 1913. Cf. E. Walford (tr.), *The Ecclesiastical History of Sozomen, ... Also The Ecclesiastical History of Philostorgius, as Epitomised by Photius*, London, 1855.

（6）Cf. A. Dihle, "Die Sendung des Inders Theophilos," P. Steinmetz (hrsg.), *Politeia und Res Publica*, Wiesbaden, 1969, pp. 330—336; G. Fernandez, "The Evangelizing Mission of Theophilus 'The Indian' and the Ecclesiastical Policy of Constantius II," *Klio*, 71, 1989, pp. 361—366.

（7）一世紀半ば頃の作と思われる『エリュトゥラー海案内記』第三〇節によると、ソコトラ島の住民は商賈のために來島したアラビア人やインド人やギリシア人の混合であったという。

(8) Cosmas Indicopleustes, *Topographie chrétienne*, 3 vols., Introduction, texte critique, illustrations, traduction et notes par W. Wolska-Conus, Paris, 1968, 1970 et 1973.

(9) ササン朝治下のペルシアのキリスト教事情（桑原達也『キリスト教史Ⅲ・東方キリスト教』山川出版社、一九七八年、六〇—六四頁参照）から見て、ネストリウス派教會であったと思われる。

(10) João de Barros, *Asia de João de Barros dos feitos que os Portugueses fizeram no descobrimento e conquista des mares e terras do Oriente*, Decadas I—IV, Lisboa, 1552—1612. この書は第二編のみ邦譯がある—ジョアン・デ・バロス『アジア史』全二巻（生田滋・池田岑夫譯註、岩波書店、一九八〇—八一年）。本稿で第二編の記事を引く場合はこの邦譯による。

(11) Afonso de Albuquerque, *The Commentaries of the Great Dalboquerque, Second Viceroy of India*, 4 vols., Tr. by W. de Gray Birch, New York and London, 1875—1884.

(12) 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』（河野純德譯、平凡社、昭和六〇年）、八四頁。

(13) 荒井獻『原始キリスト教とグノーシス主義』（岩波書店、一九七一年、以下『原始キリスト教』と略）の二二二—二二九頁（第五章「古代教會の傳承における使徒トマス」）を參照。

(14) 日本聖書學研究所編『聖書外典偽典7・新約外典Ⅱ』（教文館、一九七六年）に收錄（荒井獻・柴田善家共譯）。

(15) 荒井『原始キリスト教』、二二七頁。

(16) L. Brown, *The Indian Christianity of St. Thomas*, Cambridge, 1982 (rev. ed.), pp. 48—49, 63.

(17) インドへのキリスト教傳來については、右に擧げたブラウンの著書の四二—九一頁の他に次の書を參照——S. Neill, *A History of Christianity in India: the Beginnings to AD 1707*, Cambridge, 1984, pp. 26—49.

(18) J.-M. Fiey, "Diocèses syriens orientaux du Golfe Persique," *Mémorial Mgr Gabriel Khouri-Sarkis (1898—1968)*, Louvain, [1969], p. 208.

(19) J. C. Wilkinson, *The Imamite Tradition of Oman*, Cambridge, 1987, pp. 47, 332.

(20) *Al-Hamdānī's Geographie der arabischen Halbinsel* [=*Ṣifat jazīrat al-'arab*], Ed. by D. H. Müller, Leiden, 1968 (rep. ed.), pp. 52—53.

(21) Fiey, *loc. cit.*

(22) マルコ・ポーロ『東方見聞錄』2（愛宕松男譯註、平凡社、昭和四六年）、二三〇、二三四頁。但し、愛宕譯の「大司教」を「大主教」と改めた。

(23) Cf. Fiey, *loc. cit.*

(24) 前掲譯註書、二三四頁。

(25) *Maçoudi, Les prairies d'or* [=*Murūj al-dhahab wa ma'ādin al-jawhar*], III (deuxième tirage), Texte et traduction par C. Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, Paris, 1917, p. 37.

(26) *Voyages d'Ibn Batoutah*, I (quatrième tirage), Texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et B. R. Sanguinetti, Paris, 1926, pp. 362—363.

(27) Guillelmus Adae, "De modo Sarracenos extirpandi," *Recueil des historiens des croisades, Documents arméniens*, II, Paris, 1906, pp. 554—555. Cf. J. Richard, "European voyages in the Indian Ocean and Caspian Sea (12th—15th centuries)," *Iran*, 6, 1968, pp. 48—50; A. Kammerer, "Le périple de l'Afrique à travers les âges," *Bulletin du Comité des travaux historiques et scientifiques, Section de géographie*, 59, 1944, pp. 46—53.

(28) 前掲譯註書、一三四—一三五頁。

(29) *Ibn al-Muǧāwir, Descriptio Arabiae Meridionalis* [= *Ta'rīkh al-mustabṣir*], II, Ed. by O. Löfgren, Leiden, 1954, p. 266.

(30) 趙汝适『諸蕃志』（藤善眞澄譯注、關西大學出版部、一九九〇年）の一七五頁には、中理國を說明した中で、「妖術をつかう者が多く、うまく禽獸とか水族の姿に變身して無知な連中を驚かせたり、眩惑したりしている。外國の商船が轉じて販にきて怨みや仲違いをひきおこせば、術をかけて呪詛する。と相手の船は進むも退くもままならず、和解にこれつとめて、ようやく釋き放たれるのである。中理國ではこうした妖術を厳しく禁じている」と、マルコ・ポーロのそれとよく似た話を傳えている。因みに中理國は、ソマリア東部からソコトラあたりまでを含んでいるのであろうというのが、一般の解釋である。

(31) *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese*, Being a translation of *Kitāb al-Fawā'id fī uṣūl al-baḥr wa'l-qawā'id* of Aḥmad b. Mājid al-Najdī, by G. R. Tibbetts, London, 1981, p. 223. Cf. R. B. Serjeant, *The Portuguese off the South Arabian Coast: Ḥaḍramī Chronicles*, Beirut, 1974 (rep. ed.), p. 157.

(32) "Ahmāj al-Naṣārā"をティビッツは"ruffianly Christians"と譯し、サージェントは"a mixed rabble of Christians"と譯しながら、"hamaj"という語のアフリカにおける用法から見ると、"Christian barbarians"もしくは"Christian pagans"と譯すべきなのかもしれないと言っている。いずれにせよこの語には、海賊と結託したキリスト教徒の島民に對するムスリム側の憎惡の念がこめられている。

(33) 十五世紀の前半にインドのカリカットからの歸途ソコトラに寄って二箇月を過ごしたニコロ・デ・コンティも、島民をネストリウス派のキリスト教徒と言っている（"The Travels of Nicolò Conti, in the East, in the Early Part of the Fifteenth Century, as related by Poggio Bracciolini, in his Work entitled *Historia de Varietate Fortunae*, lib. IV," Tr. by J. W. Jones, in R. H. Major (ed.), *India in the Fifteenth Century*, New York, 1857, p. 20)。

(34) *The Book of Duarte Barbosa*, I, Tr. by M. L. Dames, London, 1918, pp. 60—61.

(35) 前掲書簡集（註(12)参照）、八四頁。

(36) 前掲書簡集所収の書簡第六八、七一、七二、七三、七四、七九。

(37) 書簡第六八に附された註七（前掲書簡集、三三二頁）によると、この計劃は結局實現しなかった。またこれに先立つ一五四三年に二名のフランシスコ會士がソコトラに派遣されたが、一名はすぐゴアに歸り、他の一名は一五四四年末までいたが、一五四五年には離島したと思われるという。

(38) W. Foster (ed.), *The Embassy of Sir Thomas Roe to India 1615—19, as narrated in his Journal and Correspondence*, New and rev. ed., Oxford, 1926, pp. 22—23. Cf. S. Purchas, *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes*, IV, Glasgow, 1905, p. 321.

(39) *Viaggo all'Indie Orientali del P. F. V. M. di Catarina da Siena*, Roma, 1672.

(40) *The Book of Ser Marco Polo*, II, Ed. and tr. by H. Yule; 3rd ed. rev. by H. Cordier, London, 1929 (rep. ed.), p. 410.

(41) *Embassy to the Eastern Courts of Cochin-China, Siam, and Muscat; in the U. S. sloop-of-war Peacock, David Geisinger, commander, during the years 1832-3-4*, New York, 1837, p. 361.

(42) "Memoir on the Island of Socotra," *Journal of the Royal Geographical Society*, 5, 1835, p. 216.

(43) *Ibid.*, p. 218.

(44) Th. Bent and Mrs., *Southern Arabia, Soudan and Socotra*, London, 1900, p. 356.

(45) "Socotra," *Antiquity*, 34, 1960, pp. 107—108.

(46) *Kings of Arabia, The Rise and Set of the Turkish Sovranty in the Arabian Peninsula*, London, 1923, p. 283.

(47) Yule, *loc. cit.*

(48) 『オリエント』第二五巻第一號所収の拙稿（註(3)参照）にその寫眞を掲載した。

(49) 『博物誌』第二二巻（第二八章）第一一五—一一六節。

(50) 『藥物誌』第五巻第一〇九節。

(51) 『博物誌』第二二巻第一一六節、及び『エリュトゥラー海案内記』第二〇節。

(52) *The Periplus Maris Erythraei*, Princeton, 1989, pp. 168—169.

(53) 『博物誌』第八巻（第一一一—一一二章）第二一一二四節。

(54) Cf. G. Watt, *A Dictionary of the Economic Products of India*, II, Calcutta, 1889, pp. 17—19; E. H. Schafer, "Rosewood, Dragon's Blood, and Lac," *Journal of the American Oriental Society*, 77, 1957, pp. 132—134.

(55) 中國については、右に擧げたシェイファーの論文の一二二—一二四頁、及び藤善譯『諸蕃志』（註(30)参照）の一二六〇—一二六一頁（血碣の條）を参照。

(56) 『諸蕃志』では大食國と中理國の産物として血碣（碣は竭の誤り）が擧げられている。また『宋史』巻四九〇ではこれ

は層檀國の産物となっている。なお『諸蕃志』の血竭に關する藤善氏の註釋は、これをデモノロプス・ドラーコと解している點で誤っている。特にソコトラ産のものが間違いなくドラセナ・キンナバリであることは、筆者自身が訪島時に確認した。

(57) ソコトラ語で麒麟竭をさすイディハハ（idihah）と同根語であろう（Cf. W. Leslau, *Lexique soqotri*, Paris, 1938, p. 52)。

(58) Cf. A. Grohmann, *Südarabien als Wirtschaftsgebiet*, I, Wien, 1922, pp. 119—121.

(59) *Al-Hamdānī's Geographie*, p. 53.

(60) Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, III, Bayrūt, 1957, p. 227.

(61) *The Periplus of the Erythraean Sea*, London, etc., 1912, pp. 138—139.

(62) Jacob, *op. cit.*, pp. 280—281.

(63) ソコトラの南西約三〇キロの海中に浮かぶサムハ島（Jazīrat Samḥa）とダルサ島（Jazīrat Darsa）が「兄弟（al-Ikhwān）」と呼ばれるのは、二つの形の似た小島が鄰接していることによるのであって、別にギリシア神話の雙子神と關係がある譯ではない。バロスの『アジア』の第二編第一部第三章では、「その形がたがいに似ているために「二人の姉妹（ドウアス・イルマンス）」と呼ばれている」と記されている。

(64) 第一一章第一六節、第二〇章第二四節、第二一章第二節。

(65) 荒井『原始キリスト教』、二二三頁。

(66) 『聖書の世界』第五卷（講談社、一九七〇年）に收錄（荒井獻譯）。

(67) 荒井『原始キリスト教』、二二三頁。

this idea. The Qing government changed its policy, deciding not to interfere with poppy cultivation while nominally still keeping it illegal. Thereafter, native opium production expanded year after year, until at the end of 1880s native opium production reached three or four times the amount of imported opium. Robert Hart, the Inspector General of Chinese Maritime Customs, became aware of the potential value of native opium as a source of revenue and advised Tsungli Yamen to levy a heavy tax on it. Needless to say, the official taxation of native opium meant the legalization of native production. Tsungli Yamen and the central government accepted Hart's idea, and provincial officials were ordered to tax native opium and precisely report the amount collected from it. The Qing government thus changed its policy from prohibition to legalization due to its great need for revenue.

SOME NOTES ON THE CHRISTIANITY ON SOCOTRA

SHITOMI Yuzo

The island of Socotra—today part of the Yemen Arab Republic—lies near the main shipping route from the Red Sea to India and East Africa, and it has been famous since remote antiquity for its exotic products. Many ships and traders visited it and their reports were included in the books of classical, Islamic, and modern European authors to constitute our historical sources. In this article I examine such reports particularly for references to Christianity on Socotra.

Cosmas Indicopleustes, author of *The Christian Topography*, confirms for us that Socotra was already Christianized by the first half of the sixth century, so Christianity had reached the island even earlier. We do not know exactly when or by whom it was introduced, though a traditional account attributes it to St. Thomas, legendary Apostle of Parthia and India.

By the end of the thirteenth century at the latest, Christian islanders were generally under the authority of a Nestorian bishop ordained in Persia

or Iraq. But after that time they were secluded from the outside Christian world, and in complete subjugation to the Muslim invaders from Mahra or Oman. Under these conditions the Christianity on Socotra was inevitably corrupted. Today there are not only no Christians but even almost no trace of Christianity remaining on the island.

At the end of the article, I propose a new interpretation of the Arabic name "dam al-akhwayn" ("dragon's blood"). It probably means "the blood of St. Thomas"; it may also refer to Christ himself, as some Christians believed St. Thomas and Christ to have been twin brothers.

CHANGES IN THE SILK TRADE IN MODERN IRAN

SAKAMOTO Tsutomu

Raw silk had been the principal export article of Iran since medieval times. In 1864, however, pébrine, silkworm disease which originally broke out in France and Italy, spread to Iran by way of Ottoman territory, and devastated raw silk production in the province of Gīlān. Raw silk trade simultaneously declined. Restoring the production and trade of raw silk was critical task, since Iranian economy considerably depended on the raw silk export. Uninfected silkworm eggs were imported from Japan in an attempt to meet the problem, but the Japanese silkworm eggs were not suited to the soil of Iran and the attempt failed. From the beginning of 1890s, silkworm eggs were imported from Bursa, and consequently raw silk production in Gīlān recovered. However, the export trade never surpassed earlier level, and changed its article from raw silk to cocoons. This trade was controlled by Greek merchants from the Ottoman empire. Thus Iranian silk trade was continued but under conditions of greater subordination to the worldwide capitalist economy system than previously.